氏　　名	清村　志乃
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	乙第３０４号
学位授与年月日	平成２７年１月７日
審査委員	主査　教授　　田島　義証
	副査　教授　　並河　　徹
	副査　教授　　川内　秀之

論文審査の結果の要旨

好酸球性食道炎は欧米において急激な有病率の増加を示している。近年、本邦においても報告例が増加しているが、日本人における臨床的特徴は十分に評価されていない。申請者らは、好酸球性食道炎の主要な病理所見である食道好酸球浸潤の診断に有用な症状および内視鏡所見を明らかにすることを目的に臨床研究を行った。当院および関連施設で上部消化管内視鏡検査を施行した 17,324 例のうち、食道関連症状を有する 319 例および無症状だが好酸球性食道炎を疑う内視鏡所見を有する 30 例の合計 349 例を対象に、食道からの生検で好酸球浸潤の有無を評価し、食道好酸球浸潤の診断に関連する症状および内視鏡所見についてロジスティック回帰分析を用いて解析した。その結果、食道関連症状を有した 319 例のうち、内視鏡所見を伴った 30 例では 7 例（23.3%）に食道好酸球浸潤を認めたのに対して、内視鏡所見のない 289 例で食道好酸球浸潤を認めたのは 1 例（0.35%）のみであった。また、症状がないものの内視鏡所見を有した 30 例中 4 例（13.3%）に食道好酸球浸潤を認めた。内視鏡所見では縦走溝が最も頻度が高く、診断に関連する有用な因子（OR=41.583）として抽出された。一方、嚥下困難などの症状については有意な関連性は認められず、食道関連症状のみで内視鏡所見を伴わない場合、食道好酸球浸潤を認める頻度はかなり低い（0.35%）ことが明らかとなった。これらの結果は、本邦における好酸球性食道炎の診療において有用な成果と考えられる。